テックワールド

大阪教育大学名誉教授
堀　薫夫

二〇二五年を代表する出来事といえば、大阪・関西万博の開催だろう。私も何回か行ったのだが、事前予約をして行ったパビリオンはテックワールドだった。

関西万博では、大屋根リングの内側が海外パビリオン、外側が国内パビリオンと設定されていたが、一つだけ例外があった。それがテックワールドだった。

ここは玉山デジタルテック株式会社なる民間企業によるパビリオンなのだが、はてそんな名前を聞いたことがあったか？　しかし玉山は台湾最高峰の山の名称であり、ＴＷは台湾の国識別コードでもある。日本の外務省は、中国から、本パビリオンは一民間企業のパビリオンだと明記するように求められていた。

昨年十一月の高市総理の台湾有事をめぐる発言から、日中関係は険しくなってきている。台湾をめぐる問題は非常にセンシティブな問題であるが、事実として指摘できるのは、海外の「地域」のパビリオンが大屋根リングの外側の区域に入っていたということである。

大阪万博の象徴であったのは大屋根リングであり、そこには「多様であっても、ひとつ」というメッセージが込められていた。つまり多様性を尊重したうえでのつながりづくりというメッセージがそこに込められていたのである。私もコモンズ館でいくつかのアフリカの人たちと話ができてうれしかった。政治体制や信仰が異なっていても、つながりと交流を創出することはできる。

台湾には総統選挙制度があり、ネット上などでの表現の自由もあるといえる。中国本土では必ずしもそうでないかもしれない。しかしそれらをこえるつながりの糸口を見出す努力の中にこそ、万博の意義があったのかもしれない。